

第8回 虎ノ門フォーラム

主 催： 特定非営利活動法人ユーラシア21研究所
日 時： 平成19年12月19日(水) 18:00～19:30
場 所： 海洋船舶ビル10階ホール

プログラム

1. 開 会
2. 講 演 「ユーラシアにおけるトルコ族の世界」
講師： 廣瀬 徹也 (HIROSE, Tetsuya)
太平洋国会議員連合中央事務局事務総長、元駐アゼルバイジャン大使
3. 質疑応答
4. 閉 会

配布資料

- ・ユーラシアにおけるトルコ族の世界 (レジュメ)

◎講演終了後、書籍の販売を行います。

『**テュルク族の世界 ―シベリアからイスタンブルまで**』 廣瀬徹也 東洋書店
〔著者割引価格〕 500円

『**ロシアへの反論**』 企画・構成：ユーラシア21研究所 執筆・編集：安全保障問題研究会 自由国民社
〔虎ノ門フォーラム特別価格〕 1,500円

これからの虎ノ門フォーラムのご案内

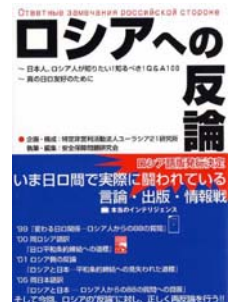
1月10日(木) 18:00～ 「領土と国境―日露関係についてのヨーロッパからのヒント―」(仮題)
講 師： 佐瀬 昌盛 (安全保障問題研究会会長、防衛大学校名誉教授)

*** 19:15～20:00 『ロシアへの反論』出版記念を
兼ねた懇親会を行います〔参加費無料〕**

1月23日(水) 18:00～ 「ビルマ(ミャンマー)の民主化と日本の役割」(仮題)
講 師： 田辺 寿夫 (ジャーナリスト)

2月 6日(水) 18:00～ タイトル未定・ロシアの情勢についてお話いただく予定です
講 師： 石川 一洋 (NHK 解説委員)

2月20日(水) 18:00～ 「北朝鮮の脅威と日韓の対応戦略」(仮題)
講 師： 高 永喆 (コリア国際研究所首席研究員、元韓国国防省情報本部北朝鮮担当官・日本担当官)



第8回虎ノ門フォーラム 平成19年12月19日(水)

『ユーラシアにおけるトルコ族の世界』 廣瀬徹也

テーマ：ユーラシアにひろがるテュルク族（トルコ系言語を話す人たちの総称）の歴史と彼らを取り巻く状況を見る→これら諸国との関係の強化は日本外交の選択肢の一つ

I. ユーラシアのテュルク族の広がり

現代定住テュルク族の最東端ヤクート人（自称サハ）が約4割を占めるサハ共和国：

（ダイヤモンド王国）

中央アジア、西アジア、コーカサス：トルコ人、アゼルバイジャン人、トルクメン人、ウズベク人、カザフ人、キルギス人、ウイグル人（アゼルバイジャン人のみシニア派が多い。他はほとんどスンナ派）

ロシア、東欧にも痕跡を残す

最西端：ドイツはじめ西欧の都市に数百万人のトルコ人移住労働者とその家族が住む。

II. 歴史上のテュルク族

1. ユーラシアへの拡大

- ・原郷はウラル山脈以東の草原地帯か
- ・草原のテュルク族の西進→南ロシア草原への進出→「モンゴル・タタールのくびき」→その末裔がヴォルガ地方カザンやクリミアのタタール人（カザン・タタールは19世紀末以降、帝政ロシア社会内でのムスリムの地位向上に大きな役割）
- ・中央アジア・西アジアへの進出
テュルク族のイスラーム化—神秘主義の果たした役割
注：イスラーム神秘主義教団は現在でも世界各地で活発に活動しており、イスラーム復興主義（原理主義）と並ぶ思想運動の担い手
マムルーク（軍事力を買われた奴隷親衛隊）の採用とオグズ族（テュルクメン）の西遷
- ・テュルク・イスラーム文明の誕生（ティムール朝のサマルカンド）
- ・現代も生きる口承文学：キルギス人のマナス英雄叙事詩やオグズ族世界共通の英雄物語集「キタップ・デデ・コルクット」

2. オスマン帝国の興亡

- ・中央集権型イスラーム帝国——スルタン（のちカリフも兼ねスンナ派イスラーム世界の盟主となった）の権限を支えた巨大な軍隊と軍人官僚、書記官僚、法官官僚（ウラマー）までも組み込んだ精緻な統治機構
- ・パクス・オトマニカ（オスマンの平和）の時代
16世紀末、帝国の面積2000万平方キロ、総人口推定8000万人。農業生産が増加し、都市で手工業が発達。帝国の国庫は広大な領土から得る税収と陸海のルートを通じる交易の利益によって潤った。首都イスタンブールは人口75-80万、壮麗なイスラーム建築に彩られ、世界で最初のカフヴェ・ハーネ（コーヒー店）が出現。

- ・多民族の共存（「オスマントルコ」にあらず）
- ・斜陽のオスマン帝国と欧州諸国のバルカン・中東進出（「東方問題」）
- ・帝国の改革努力と「青年トルコ人」革命
- ・第一次世界大戦の敗戦

英国の三枚舌外交→パレスチナ問題の淵源

現代も尾を引く「アルメニア人虐殺」問題

- ・オスマン帝国の崩壊がもたらしたもの

国民国家トルコ共和国の誕生（1923）：

アタテュルクの改革と「世俗主義」（徹底した政教分離）

人造国家イラクの出現とクルド民族の分断

3. ロシア帝国・ソ連支配下の中央アジアとコーカサス

19世紀「ザ・グレートゲーム」——帝政ロシアのコーカサスと中央アジア征服

綿作モノカルチャー化、ムスリムの反乱と改革運動、

バクー油田の発見——20世紀初頭には世界の石油産出量の半分を産出。ロスチャイルド家やノーベル家など「オイル・バロン（石油富豪）」の出現

ソ連時代：「バスマチ」運動、

1924年「民族・共和国境界画定」→民族の創設、

スターリン時代の悲劇：ドイツ人、チェチェン人、朝鮮人等「敵性民族」の中央アジア強制移住、遊牧民の強制定住化と集団化による飢餓でカザフ人口の4割を失う。

第二次大戦中の工業化、

環境汚染：アラル海の塩害、核実験場セミパラチンスクの健康被害

III 現代のテュルク族世界

1. トルコ共和国

（1）地政学的重要性

（イ）イスラームと西欧型民主主義の共存：

人口の99%はムスリムでありながら、世俗主義を国是とし、かつ、自由な総選挙に基づいて政権が交代するという点で、トルコは中東では数少ない民主主義国家。

92年秋以来単独政権の座にあるイスラーム色の強い公正発展党（AKP）エルドアン政権も現実路線・欧米協調路線。しかし世俗主義派たる国軍や野党と激しく対立（女性のスカーフ着用禁止問題など）→民主主義のあらたな試練

（ロ）中東における安全保障のかなめ：

兵力51.4万人、中東で唯一のNATO加盟国、米土経済防衛協力協定の存在

（ハ）中東におけるバランスー：

イスラエル・パレスチナ双方と良好な関係、トルコ・イスラエル軍事協力協定

「世俗主義」・スンナ派トルコ vs 「法学者の統治」・シーア派イラン（ただし両国は経

済的パートナー、トルコは石油需要の30%、天然ガス需要の16%をイランに依存、クルド人の分離独立阻止では共通の利害)

(ニ) 欧亜の掛け橋→歴史的、文化的連携を生かした近隣諸国への外交戦略

中央アジア・南コーカサス諸国との戦略的関係の強化：

テュルク語圏諸国首脳会議の開催（1992年以降計8回）、

「BTCパイプライン」（アゼルバイジャンのバクーからグルジアのトビリシを経てトルコ地中海岸のジェイハンに至る）の開通（2006年6月）

ロシア・黒海地域諸国と安全保障面及び経済関係の拡大

(ホ) 高い経済的潜在力：

7,206万人の優秀な人口、市場経済・対外開放政策の推進、

トルコ企業（特に建設業）のめざましい海外進出（北イラクのクルド自治区の進出外国企業の7割はトルコ企業）

(ヘ) エネルギー回廊としての重要性

(2) トルコのジレンマ

(イ) クルド民族問題：武装勢力クルデイスタン労働者党（PKK）のテロ活動対策、トルコ軍のイラク越境攻撃の動きをめぐる米、イラクとの軋轢。EUの人権面での要請。

(ロ) EU加盟問題：05年10月加盟交渉開始、キプロス共和国の扱いがネック。西欧諸国の消極的態度とトルコ国民の熱意の低下。

(ハ) キプロス問題

懸念されるトルコと欧米の亀裂：西欧社会に根付き始めたトルコ人二世、三世は掛け橋となるか

2. 独立後の中央アジアとコーカサス

(イ) 安定か民主化か

- ・ 権威主義体制の下での政治的安定と経済開発・市場経済化、
- ・ 部族主義・地域主義の残存、大統領の一族や取り巻きに権力と富が集中し汚職蔓延、民主化や人権の保護はなおざり、資源保有国と非保有国間の格差、国内の貧富の格差大、進まぬ域内協力。
- ・ ウズベキスタン：経済開発の「ウズベキスタン・モデル」初期の成功
イスラーム復興と過激派（「ウズベキスタン・イスラム運動（IMU）」など）の反政府活動——カリモフ政権の弾圧
2005年5月アンディジャン事件：強権政治を支持する露・中、批判的な欧米と日本
- ・ 解決のめどのない立たない南コーカサス三カ国の紛争：アゼルバイジャン・アルメニア間のナゴルノ・カラバフ紛争、グルジア内の民族紛争
- ・ 「革命」のドミノが中央アジアで起こるか：安定志向が強く、権威に弱い民族性
「開明的権威主義」体制は容認するのが現実的か。

(ロ)「第2次グレート・ゲーム」

NIS 諸国の独立以後、政治的影響力の確保とカスピ海地域の石油・天然ガス（確認埋蔵量、生産量とも全世界の数%にすぎない）の開発とパイプラインをめぐって、ロシア、米を筆頭に地域大国たるトルコ、イラン更に近年は中国も加わり「第2次グレート・ゲーム」とも称される勢力争いが展開されてきた。域内諸国の思惑もからむ。

9・11事件後の中東、中央アジア、アフガニスタン、パキスタン情勢の連動。

(注)日本企業の参加：アゼルバイジャンの「アゼリ・チラグ・ギュネシリ（ACG）」油田（伊藤忠石油開発 3.92%、国際石油開発 10%）、カザフスタンのカシャガン油田（国際石油開発 8.33%）。BTC パイプライン建設に伊藤忠石油開発（3.4%）と国際石油開発（2.5%）が参加、JBIC が 5 億 8,000 万ドル限度の融資契約に調印している。

(ハ) 注目される上海協力機構（SCO）：2001 年露、中、中央アジア 4 개국で結成。

2004-5 年モンゴル、イラン、インド、パキスタンが準加盟し拡大

→石油・ガス資源国と大消費国が同居する巨大な「資源共同体」の性格あり。

求められる透明性

(ニ)新疆ウイグル自治区：石油と天然ガスの宝庫。中国政府はウイグル民族の分離独立運動を弾圧、漢民族の移住を奨励、「西部大開発計画」の下で経済開発と生活水準の向上を図ってきた。

IV テュルク族と日本

世界有数の親日国トルコ：エルトゥールル号事件（1890 年）、**友好のシンボル第 2 ボスポラス大橋（1988 年）**、テヘランで孤立した邦人にトルコ救援機を派遣（1985 年）

亡命タタール人と代々木モスク（1938 年）、日本人抑留者が建てたナヴァイー劇場
対日感情は概ね極めて良好。伝統を守りつつ近代化に成功したことへの尊敬あり、日本への期待も大。ODA は政治的野心のない真の友情として感謝されている。

中央アジアとコーカサスにおける「対シルクロード地域外交」：04 年「中央アジアプラス日本」対話という新たな枠組の設置に合意、中央アジア諸国の域内協力を促進。

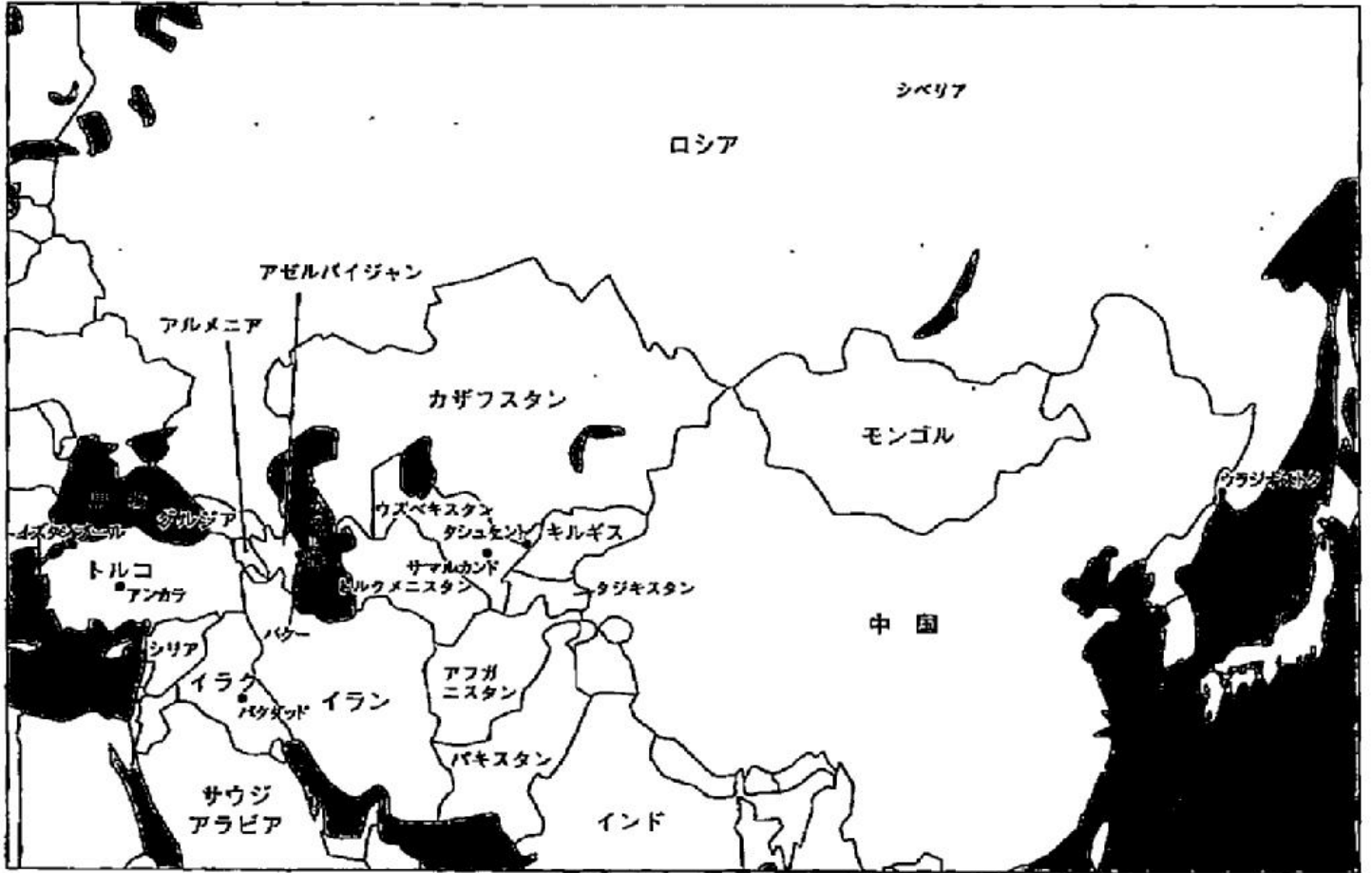
小泉総理、2006 年 1 月、115 年間で日本の現職総理として二人目のトルコ訪問、同年 8 月カザフスタン、ウズベキスタンを公式訪問、

「自由と繁栄の弧」をつくる』という戦略的構想の中で、国民の大半がイスラーム教徒でありながら、穏健なスンナ派で親日的なトルコや中央アジア諸国との協力を進めることは日本外交にとって明らかにプラス。

(参考)拙著『テュルク族の世界——シベリアからイスタンブルまで』

(東洋書店のユーラシア・ブックレット・シリーズ No 114)

(了)



本書関連地図